

Deirdre Le Faye: *Jane Austen's 'Outlandish Cousin':  
The Life and Letters of Eliza de Feuillide.*

London: British Library, 2002. 192pp.

---

千葉 麗

---

学術的な意味でも、野次馬的な意味でもジェイン・オースティン研究者の好奇心をくすぐる。本著はジェイン・オースティン（1775-1817）の従姉で、オースティンの「静」とは鮮やかな対照をなす「動」の人生を送ったイライザ・ド・フィード（1761-1813）の伝記である。イライザの本格的な伝記が書かれるのは没後2世紀近くを経て初めてで、これまでゴシップに依拠して不確かなところも多かったイライザの実像を見事に浮かび上がらせている。

イライザは波乱に満ちた生涯を送った。彼女の名付け親は、後のインド総督、ウォレン・ヘイスティングズである。奔放で美しい彼女は、最初フランス人男性と結婚したが、この夫はフランス革命の最中に処刑されてしまう。3年後、ジェイン・オースティンの兄で10歳年下のヘンリー・オースティン（1771-1850）と再婚、最初の夫との間には一人息子をもうけたが、その子は15歳で夭折した。イライザ自身は、母と同じ乳癌による闘病生活の末、52歳でこの世を去った。

著者のディアドリ・ル・フェイはブリティッシュ・ライブラリーに所属する研究者で、*Jane Austen, Her Life and Letters: A Family Record* (William Austen-Leigh and Richard Arthur Austen-Leigh, London: Smith, Elder, 1913) を増補・改訂した *Jane Austen: A Family Record* (London: British Library, 1989) で知られる。また、それまでオースティン研究において典拠とされてきたチャップマン編集の書簡集 (R. W. Chapman ed., *Jane Austen's Letters to Her Sister Cassandra and Others*, 2nd ed., Oxford: Oxford UP, 1952) の第3版 (*Jane Austen's Letters*, 1995) の編纂にも当たった。

ル・フェイは本著の中で、オースティン家の後裔やジェイン・オースティン研究者を除くと、現代の大抵の人々にとっては全く無名の一女性の生涯を、関連資料を使って丁寧に掘り起こした。200 ページ足らずのコンパクトな本ではあるが、イライザの父、タイソー・ソウル・ハンコック (1711-1775) が、カルカッタからロンドンの母娘に書き送った手紙の写しや、イライザ自身が同い年のいとこであるフィラデルフィア (フィリー)・ウォルター (1761-1834) に宛てた私信などで構成され、資料的価値は高い。

現在のオースティン研究は、サイドやサロウェイ、キャプランらの研究以降、歴史、文化研究を取り込み、学際的なものになっている (Edward W. Said, “Jane Austen and Empire.” *Raymond Williams: Critical Perspectives*. Ed, Terry Eagleton. Boston: Northeastern UP, 1989; Alison G. Sulloway, *Jane Austen and the Province of Womanhood*, Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1989; Deborah Kaplan, *Jane Austen among Women*, Baltimore: Johns Hopkins UP, 1992)。こうした研究に確かな基盤を与えるのが、地道に一次資料を発掘する本著のような研究であることは言うまでもない。編年体で書かれているので細かい章立ては割愛するが、全体は5章とエピソードからなり、イライザの母親の生い立ちから、イライザの誕生、渡仏、最初の結婚、帰国、出産、母と息子の介護、再婚、闘病生活、イライザの死、そして2度目の夫ヘンリーの再婚までを、イライザや彼女をめぐる人々の私信に最低限の考察を加えながら追っている。

タイトルにもなっている、“outlandish cousin” とは、フィリーへの手紙の中でイライザが自らを称している言葉だが(68)、オースティン一族と当時のイングランド中流階級の人々が、彼女に対して多かれ少なかれ抱いていたイメージを集約している。

たとえば、母が乳癌に倒れたためにイライザがロンドンの社交界との交わりを絶ち、看病に専念することになったとき、フィリーが見への手紙でそのことに触れている部分が引用されているが、文面からは同情に非難の入り交じった屈折した感情が窺える (“Poor Eliza must be left at last friendless & alone. The gay and dissipated life she has long had so plentiful a share of has not ensur'd her friends among the worthy . . . . She will soon feel the loss & her want of domestic knowledge”

[104])。

また、これより前にイライザからロンドンに招かれた時、(ル・フェイの言葉を借りれば) “wide-eyed country-mouse” (84) のフィリーが、刺激的な都会の様子を興奮気味に兄に報告する手紙も引用されている。だが、イライザほどの冒険心や行動力を持たず、家族のために自分の要求を飲み込むことも多かったフィリーには、いとこの暮らしぶりは、純粋な憧ればかりではなく、羨望と道徳的懐疑の対象でもあったようなのだ。二人の文通はイライザが病床に臥す晩年まで続いているが、イライザからの手紙は、フィリーのそうした複雑な心境を知ってか知らずか、一貫して屈託のない親愛の情に満ちているのが興味深い。

本著から私たちが知るイライザは、アメリカ独立戦争からフランス革命への流れの中で、次第に国内に高まっていくフランコフォビアもどこ吹く風で、パリの流行のファッションに瞠目し、イングランドとは流儀の異なるフランス式の舞踏会の様子を楽しげに報告する。帰国後は、母と夫を相次いで亡くし、病弱な息子を一人抱えるという試練に見舞われながらも、係累の元に身を寄せるでもなく、ロンドン社交界にとどまり続ける。生活のため、フランスに残してきた夫の遺産を取り戻すべく、代理人の弁護士を催促するような実利的な面も持ちあわせていたようだ。このように、本著を読むと、36歳でヘンリーとの再婚に踏み切るまでには、イライザが、(再びル・フェイの表現を借りるが) “independent young widow” (140) としての自己を確立していたことがよく分かる。10代から小説をこつこつ書きため、30代後半にしてペンで生計を立てることのできたジェイン・オースティン同様、イライザのような女性もまた当時の社会では少数者であった。だからこそ、イライザは自分に対するフィリーを含む世間一般の視線を感じとり、自らを“ourlandish”と呼び、おどけてみせたのかもしれない。

だが、ことイライザに関しては、彼女が社会から要するに「浮いて」いた理由はおそらくもう一つある。それはイライザが私生児であるという噂だ。イライザの出生に関しては、母フィラデルフィアと彼女の夫のビジネス・パートナーであったヘイスティングズの間生まれた不義の子だという噂が、当時、カルカッタのイギリス人社会に流れた。このゴシップは、ある人物が妻に宛てた手

紙によって本国にもたらされ、真偽を突き詰められることもないまま、今に到るまで伝説のごとく語り継がれている。たとえば、トマリンは *Jane Austen: A Life* (Claire Tomalin, London: Viking, 1997) の中で、ハンコック夫妻に結婚後8年間子どもがなかったことや、ヘイスティングズが名付け子のイライザのために5千ポンドの信託財産を残していることなどを理由に、可能性はありうると想像している。

ところが、ル・フェイはヘイスティングズの日記と私信に丹念に当たった上で、そのような事実を裏付ける文章は一切ないと結論付けた。詳細は本著にゆだねるが、ヘイスティングズがイライザに対し、周囲から見れば十分すぎるほどの金額を贈与した事情についても、説得力のある見解を述べているのである。

この伝記を読む限り、当時のイングランドの基準からすれば、イライザに“outlandish”なところがあつたのはやはり事実なのだろう。彼女はそのフランス流のファッションと、ロマンスの遍歴とで、時に「女性らしさ」を過剰に撒き散らす存在であつたし（「女性らしさ」という価値は置かれた状況によって美德にも悪徳にも反転し得る）、中年になってからの気丈さと生活力は当時の社会が求める女性の規範を逸脱していくものでもあつた。しかし、それと同時に、ル・フェイが提示する等身大のイライザ像からは、自らの存在につきまとう攪乱的な空気を、彼女自身が意識して演出していたわけではないことも明白なのだ。周りが自分を“outlandish”と見ていることは承知しつつも悪びれるでもなく、フィリーへの手紙は率直さの一言に尽きる。彼女をめぐる好奇の目が作り出したとも言える「私生児」のイライザ像との、この落差を比較するときに見えてくるのは、彼女自身の“outlandish”さ加減よりもむしろ、人々が彼女に対して漠然と感じていた不穏さの方であると思う。

そして、おそらくこの点はオースティンの *Mansfield Park* に登場するメアリー・クロフォードの解釈に重要なヒントを与える。イライザとフィリーの不思議な友情は、奔放で都会的なメアリーと、内気で道徳的なファニー・プライスの関係を想起させるものだ。とりわけ、クリスマスの素人演劇に一緒に参加しようというイライザからの再三の誘いにフィリーが後ろ髪をひかれつつも、母親の反対にあって断るという実話は、*Mansfield Park* において、メアリーとファ

ニーが素人演劇の計画に対照的な態度を示す場面に相通ずるもので興味深い。小説中、メアリーを観察するファニーの視点は大体において批判的なのだが、メアリーのファニーに対するそれには、時に共感が入り混じる。最終的にはファニーの価値観が結婚相手のエドマンドのそれに同化し、物語全体を覆っていくのでその点が見過ごされがちだが、原著を読んだ後では、もっと問題にされてよいのでは、と思われてくる。

原著が今後のジェイン・オースティン研究に与えるであろう影響について、最後にもう一点、簡潔に触れておきたい。イライザは、メアリーだけではなくジェイン・オースティンの習作、*Lady Susan* のヒロインのモデルであるという見解もある。この作品は、近年まで研究対象とされることが少なかったため、未だ研究の余地を残している。レディー・スーザンはジェイン・オースティンの作品中、きわめてユニークなヒロインで、批評家からはしばしば「悪女」と称されてきた。だが、原著が浮かび上がらせたイライザの「世知に長けた中年女性」としての一面を重ねあわせたとき、別の解釈の可能性が見えてくるだろう。

以上のように、原著は、イライザという実在の女性がオースティンの創作に与えたインスピレーションへの興味をかきたてるものである。だが、前述した文化研究、とりわけ対抗文化としての女性のコミュニティーに着目するサロウェイやキャプランにつらなる研究にとって、原著は単なる登場人物のモデル探しという以上の意味を持つだろう。キャプランは「女性の文化」(women's culture) の生の声をもっとも表れやすいジャンルとして私信の重要性を指摘したが(6)、それは、私信に男性中心社会への不服があげすけに語られているから、という訳ではない。私信には「良妻賢母思想が作り出した女性のアイデンティティや役割に対する肯定と批判が錯綜している」(7)からこそ、リアルだし貴重なのだ。原著はそのような資料の好例であり、今後のオースティン研究のみならず、文化研究に携わる研究者にとっても手がかりとなりそうな一冊である。